

工部省と岩倉使節団

柏原 宏紀

まず、本稿の問題意識から説明する。筆者は工部省という官庁を研究しているが、同省は明治3年（1870）閏10月に、鉄道や鉱山や電信や造船、技術者養成など近代化諸事業の着実な実施を目的として設立された。インフラ整備といわゆる「殖産興業」を担当した官庁として知られている。岩倉使節団については、周知の通りであり、ここで改めて説明する必要はないが、工部省からも少人数ながら理事官らが欧米各国へ派遣をされ、伊藤博文工部大輔も副使として幹部に名を連ねていた。

この工部省と岩倉使節団はある意味、西洋を念頭に置いた近代化という同じ方向を目指していたので、その点では工部省にとっても理事官らの派遣の意義は大きかったように見えるが、実際のところはどうかだろうか。そして、日本全体への影響はどのようなものであったのだろうか。

本稿では、岩倉使節団での工部省理事官らの調査について、特にこの工部省での意味や位置を考えてみたい。具体的には、まず理事官の人選を手がかりにして、工部省内での使節団の位置づけを概観し、次に工部省理事官らの調査内容について簡単に明らかにして、その上で、調査が工部省やあるいは日本全体にいかなる意味を持ったのかについて、知識や人材面から基本的な検討を加えていきたい。

先行研究は、工部省自体については一定の蓄積があるが、工部省と岩倉使節団というテーマではまだなかなか研究がなされていない部分がある。従って、岩倉使節団を念頭に置いて工部省との関係を議論することで、新たな側面を浮かび上がらせることもできるのではないか。そして、日本の近代化の一側面を解明することにもつなげられるのではないだろうか。

続いて、本論に入る。

第一に、工部省における岩倉使節団の位置づけについて、理事官らの人選を手がかりに見ていく。

工部省からの派遣官員は、副使に伊藤が入り、理事官には肥田浜五郎という当時の造船部門責任者が選ばれ、随行員には鉱山部門の大島高任が入っている。それに留学生のような形で、鉄道中属の瓜生震が加わった。中属は判任官であって、幹部クラスというわけではないが、そのような若い官僚も加わっていた。

肥田浜五郎について詳しく見てみると、彼は旧幕臣であり、幕末にオランダへ洋行した経験も持っていた。明治2年8月に民部省に入ってから、3年7月に土木部門幹部を経て、閏10月に工部省ができた段階から少丞という形で同省に入り、翌年8月に造船頭兼製作頭に就いたのであった。すなわち、肥田は工部省の創設時からの幹部であって、幕末以来、造船に通じており、いわゆる技術官僚に位置づけられる人物である。専門の造船分野については、工部省を事実上創設した山尾庸三という、世間では長州ファイブの一人として知られている人物と競合するところもあり、少々微妙な立場に置かれていたとも言えよう。

山尾は、明治4年4月段階で工部省の分担責任者リストを作成していたが、その中に肥田の名前は見出せず、造船部門の責任者は山尾自身の名が書かれていたのであった。そのことから、やはり肥田浜五郎は同省主流派とやや距離のある人物だったように推定される。

次に、大島高任は南部藩の出身で、幕末から鉱山事業に従事し、明治2年8月にまず大学大助教となり、12月に民部省鉱山部門に入って、工部省ができてから2か月ほどで工部権少丞として同省に入り、4年8月に鉱山助に転じた。鉱山の担当幹部は複数人配置されており、その一人という位置づけであった。彼もまた工部省創設間もない段階からの幹部であり、鉱山事業の経験を有した技術官僚の一人であった（研究書ではなく伝記小説であるが、史料を活用して大島高任の一生を描いた著作として半澤周三『大島高任』がある）。

上述した山尾の責任者リストにおける鉱山部門の責任者には、山尾と同じいわゆる長州ファイブの一人である井上勝の名前があり、大島の名前はないが、同じく鉱山部門に配された朝倉盛明の名前も見られないので、ある意味、部門全体の統括はそれまで鉱山部門責任者であった井上が適任とされて、大島らはその井上を支えるような立場として見られていたのだろう。井上と朝倉はいずれもそれまでに既に洋行経験があったが、大島は洋行経験を有さなかったのが、彼が岩倉使節団随行員に選ばれたのは、部門としては意味があったと言えるのではないか。

その上で、工部省での岩倉使節団の位置づけを検討する。省内での意味ということ言えば、西洋化事業を進める工部省では、既に多くの部門でお雇い外国人を招聘しており、実際に事業に着手もしていた。また、それを支える洋行経験のある官僚も一定数在籍していた。従って、岩倉使節団を先取りするような部分もあり、この使節団に調査官を派遣する必要性はそれほど高くなかったのかもしれない。

ただ、大島のように洋行経験のない者を西洋で実地調査させるということで、人材育成面には一定の意味があったと考えることはできよう。人選にさほどの議論がなされたような形跡は見られず、人数も非常に限られているので、このことから工部省内での使節団の位置づけが垣間見えるが、そのような省内での軽い位置づけだからこそ、やや政治的な理由が入る余地もあっただろう。

ここで政治的意味について考察しておく。岩倉使節団が外遊する少し前の9月段階に

において、実は工部省内では横須賀や石川島の造船所の扱いをめぐる、肥田浜五郎と山尾庸三らが意見を違えている状況があり、当時、伊藤の前任であった工部大輔（卿が空席だった工部省の事実上のトップ）後藤象二郎は肥田の意見を採用しようとしていた。そして、その直後に後藤は転任となり、肥田案は退けられることになったので、肥田も山尾らによって使節団に送り込まれたような側面があったのではないか。そのような政治的部分も工部省における使節団の人選の背景にあったと推測されるのである。

第二に、工部省理事官らの調査内容について検討してみよう。

まず、肥田理事官の調査項目としては、肥田自らが工部省で緊要と考える項目を列挙している。すなわち、蒸気諸機械の製作、会計簿の仕組みなどが掲げられ、その他時間があれば取り組む課題も幾つか挙げられていたが、これらについても省内で議論された形跡はやはり確認できない。結局のところ、工部省は当時においてあまり使節団の調査を重要視していなかったことがうかがえよう。

しかも、肥田はその後、省務と関係のない岩倉具視大使から、鉱山と鉄道の調査をするよう内命を現地で受けて、鉱山は随行員の大島に任せ、自身の関心のあった鉄道を調査対象に加えるような状況でもあった。結果として、彼は会計関係の研究を外しており、その点でも当初の視察項目が省全体の決定ではなかったことが垣間見えるのである。

次に、調査の結果はどのようになっていたのだろうか。肥田も「理事功程」という報告書を提出してはいた。そして、その中では、主に蒸気諸機械の製作、鉄道、造船などを調査したということが書かれているが、注目すべきは、実際に伝習したために別段の取調べ書類はないとして、どの内容も数行程度の大綱を示すにとどまっていることである。新しい造船の図面なども収集していたようであるが、これらも肥田が保有していると書かれている。また、実際に様々な製造や建築を仰せつけられれば成功させられるとの記述もあり、自身の技術習得自体を調査結果としている部分が大きかったようである。技術を学ぶということの意味は、まさにそういうところにあったと言えるのだろう。

大島随行員の調査項目は鉱山の取調べであったが、彼の公的な調査結果報告書は管見の限りでは確認できず、詳細はよく分からない。もっとも、調査概要については、使節団の公文書や私文書の日記、彼の日記などからある程度は判明している。欧米では鉱山や溶鉱場や鉱山会社、鉱山学校などの見学をし、数年で大きく変化しまだ文書になっていないような溶鉱方法なども調査して、関連の書籍や機械なども買い集めたとしている。

その他、伊藤については、副使として使節団全体の意思決定を担い、また工部省の理事官らとの相談に応じたり、工部省関係の施設などの見学もしたりしていた。もともと鉄道創業にも関わっていた彼は、西洋化事業を見る目が既に備わっていた部分もあっただろうから、ここでの経験がその後工部卿として活躍していく基礎になった可能性も指摘できよう。

一方、瓜生は、留学生として岩倉使節団に随行し、大島らの鉱山調査に同行したことは確認でき、その後、当面留学を継続したことも明らかであるが、その詳細は史料が確

認できず明らかにはできない。

第三に、工部省の理事官らの調査の意味について検討する。

まず、工部省にとってその調査はどのような意味を持ったのか。肥田理事官については、欧米調査からの帰国直後の明治6年5月に工部大丞となり、同月中に海軍大丞兼主船頭へ転任した。彼は、欧米から帰ってきてすぐに海軍省へ異動したことになる。しかも、先述のように、肥田は調査書類を残しているわけではなく、自らが調査結果であるとしていたので、帰国直後に彼が転任してしまった以上、彼が工部省にもたらした成果はほとんどなかったであろう。しかも、このような結果は、肥田が派遣されたときの既述の経緯とも整合的であると言えよう。

一方、大島については、帰国後、8年3月に鉱山権頭に昇進し、9年12月には工部の1等技長になっているが、翌年に廃官になり、就いていた官職がなくなる形で一旦工部省を離れた。その後、13年7月に再び工部省に復帰をして、16年3月に工部省大技長として再度技術系官職に就いた。彼は3年半、工部省を離れていたものの、同省が廃止されるまで長く鉱山部門に在籍したことも間違いなく、調査の成果を活かすことができただろう。

その他、留学生であった瓜生震は、帰国後、工部省鉄道部門の判任技術官として数年在籍したことが確認でき、その中で調査の成果を省に還元できた部分もあっただろう。ただ、その判任官時代の行動は、史料上なかなか明らかにできず、詳細は不明である。

また、使節団とは別に留学中で、使節団に見出された粕林之助や山本重輔は、後に工部省の奏任技術官僚となって活躍することにもなるので、そのような人材を工部省は早い段階から見つけられたということも指摘できよう。

続いて、この工部省の調査が近代日本に与えた影響についても検討する。

政府全体として見れば、まず肥田は工部省を辞めた後、海軍に異動し、その後、宮内省を経由して、また海軍に戻るが、海軍時代にはおそらく造船関係の任務に従事していたので、岩倉使節団での知識が活かされたのではないかと推測される。また、大島については、工部省が廃止された後も、大蔵一等技師や大蔵技監など大蔵省の技術官僚となって鉱山部門に関わり続けたので、より調査結果を政府で活用することができたと言えるだろう。伊藤については、日本の近代化に相当に大きく貢献したことは間違いがないが、瀧井一博氏の研究を始めとして、既に明らかにされているので、ここではこれ以上踏み込む必要もないだろう。

そして、日本全体の近代化に関わる人材面での貢献ということ言えば、自ら技術習得した肥田のような極端な場合ではなくても、洋行経験をした人材は、西洋化に向けて社会が全体として動く中で、民間でも大きな活躍が見込まれた。もちろん、肥田も第十五国立銀行や日本鉄道会社などの創設に関わっていた。しかも、いずれも岩倉具視との関係によるもので、この岩倉との関係は岩倉使節団の中で生まれている部分もあった。岩倉使節団への工部省理事官らの参加が在野において大きな意味を持ったとも言えよう。

瓜生も退官後に高島炭鉱に関係し、三菱の幹部や汽車製造会社の社長などにもなっている。岩倉使節団の知識がどこまで役に立ったか明らかにはできないものの、洋行経験を活かした部分があったのではないだろうか。

最後に、本稿の主題である「工部省と岩倉使節団」に関わる結論と今後の課題をまとめておく。

結論としては、そもそも工部省は岩倉使節団への官員派遣をそこまで重視していなかった。勿論大島のように帰国後に同省に対して相応の貢献をしていたことも確認できるが、全体としては工部省への影響は限定的だったと言わざるを得ないだろう。もっとも、新しい技術官僚をこの岩倉使節団の場で確保したという点では大きな意味もあった。

今後の課題としては、本稿では史料的限界もあって推論が多くなってしまったので、さらなる史料収集などによって、岩倉使節団に工部省官僚を派遣したことの意味について、工部省内、近代化事業全体共に、さらに詳細に解明をしていく必要があるだろう。

例えば、帰国後の大島の業務に岩倉使節団の成果がどのように活かされたのか、直ぐ工部省から転出した肥田は、海軍省で使節団での調査内容をいかに活用していったのかなども検討せねばならないだろう。その際は、それぞれの所属組織の政策展開との関係も併せて考察する必要もある。加えて、在野において彼らがどのような活躍をしたのかも明らかにせねば、彼らの日本全体の近代化への影響を計り知ることは難しいと言えよう。

また、殖産興業という観点からも論及しておこう。西洋事情に通じた開明派官僚が中心を占めた大蔵省も明治初年に殖産興業を担当していたが、同省も理事官等を派遣しており、視察団での調査結果がもたらされていた。同省内の開明派官僚の存在感からすれば、やはり工部省と同じような位置づけでしかなかった可能性もあるが、この大蔵省（その後内務省）が軽工業や勸農、農業の近代化も担当していたことからすれば、あるいはこれらについて調査に意味があったとも考えられる。その点も含めて、人物あるいは分野ごとに考察を重ねていかねばならず、それを行うことでこそ、岩倉使節団がこの殖産興業や日本の近代化にどのような影響を及ぼしたのか、その全貌を解明することができるだろう。

参考文献・史料

伊藤之雄『伊藤博文』（講談社、2009年）。

鈴木淳編『工部省とその時代』（山川出版社、2002年）。

鈴木淳「咸臨丸機関長肥田浜五郎の明治」、鈴木淳編『経済の維新と殖産興業』（ミネルヴァ書房、2022年）。

瀧井一博『伊藤博文』（中公新書、2010年）。

半澤周三『大島高任』（PHP研究所、2011年）。

本田敏雄「岩倉使節団と大島高任」『実学史研究』Ⅶ、1991年。

拙著『工部省の研究』（慶應義塾大学出版会、2009年）。

拙著『明治の技術官僚』（中公新書、2018年）。

拙稿「平岡通義と工部省」、前掲『経済の維新と殖産興業』。

大島信蔵編『大島高任行実』（大島信蔵、1938年）。

国立公文書館、国会図書館所蔵「官員録」

『工部省沿革報告』、大内兵衛・土屋喬雄編『明治前期財政経済史料集成』第17巻（改造社、1931年）。

国立公文書館所蔵「公文録」

国立公文書館所蔵「単行書・大使書類原本肥田為良・吉原重俊・川路寛堂・杉山一成報告理事
功程・全」

国立公文書館所蔵「単行書大使書類原本在米雑務書類」